3年次生向け 第1回就職ガイダンス

「ウィズコロナ時代」の活動を解説

3年次生向けの第1回就職ガイダンスが10月10日から17日まで、5回にわたってオンラインで開催された。卒業後に就職を希望する3年次生が受講し、「ウィズコロナ時代」の就職活動について、心構えを新たにした。

講師を務めたキャリア形成支援課の職員は、「新型コロナウイルス感染症の影響でさらに状況が変化することが予想されるが、皆さんがやるべきことは今までとさほど変わらない。正しい情報を収集して、積極的に動くこと。変化する状況でも勝ち抜くための対応力を身につけてほしい」と語った。

自己分析や企業研究など、必要な対策は年内に完成させるよう助言。また、秋冬に開催される説明会やインターンシップへの積極的な参加も呼び掛けた。リクルートキャリアから講師を迎え、SPI試験についての解説もあった。

リアルタイムアンケートシステム「レスポン」を使って参加学生から質問を受け付けた。「具体的にどうやって志望企業をリストアップすればいいのか」という質問には、キャリア形成支援課職員が「自分の就活の軸を決めよう。そのために積極的に講座に参加したり、就職相談を受けたりしてほしい」と答えた。

オンラインで行われた第1回就職ガイダンス

就職活動ガイドを公開　本学HP

10月から、本学HPで専修大学生のための就職活動ガイドを公開している。昨年度まで「就職手帳」として配布していたものをウェブで公開。自己分析や業界研究など就職活動の準備段階から、就職活動のマナーや面接対策などの実践面まで、詳細にアドバイスしている。

また、キャリア形成支援課の活用術や就職支援システム（S-net）の利用方法も掲載。就職した先輩からのメッセージでは、業種別に就職活動で重要なポイントを紹介している。ログイン方法はS-netで確認を。

憲法理論研究会代表に就任

内藤法学部教授

内藤光博法学部教授＝写真＝が国内最大規模の憲法学会・憲法理論研究会（憲理研）の新しい代表（運営委員長）に選出された。10月10日に開催された運営委員会で選ばれた。任期は2年。

憲理研は、1964年に、30人ほどの国内の若手の憲法学者により、「社会科学としての憲法学の理論的な展開」を目指して創設された。現在は、会員数350人を超える国内でも最大規模の憲法学会である。

憲理研の特徴的な活動として、毎月の例会と夏の研究合宿などを通じて、若手研究者（大学院生、助手、助教など）を中心にできるだけ多くの会員が積極的に報告・討論に参加する運営を行っている。

同日にオンラインで開催された月例研究会では、「安全保障に関する憲法的統制」をテーマとして、若手の憲法研究者を中心に活発な議論が戦わされた。

内藤新代表は、「憲理研は、憲法理論の研究の深化はもとより、若手研究者の育成にも貢献してきた。今後も、若手研究者の登竜門として憲理研の研究活動を活性化していきたい」と抱負を語った。

就職だより

〈4年次生へ〉就職活動継続中の皆さん、状況はいかがですか。キャリア形成支援課では皆さんを支援すべく、11月20日（金）～12月4日（金）〈土・日・祝及び11月25日（水）を除く〉に対面式で、12月7日（月）～11日（金）にオンラインで学内企業説明会を開催します。事前申し込みが必要。参加企業、申し込み方法など詳細は決定次第、ポータルでお知らせします。

専修大学生を採用したい、という企業約20社が集まります。企業採用ご担当者から選考に関する各種情報を詳しく聞くことのできる絶好のチャンスです。ぜひとも参加してください。悩むよりもまず行動です。

〈3年次生へ〉先月の第1回就職ガイダンスを機に、就職活動の準備を進めていることと思います。ガイダンスでは、「社会を知る」意味で、早いうちに企業に関する情報を入手しておくことをお勧めしました。

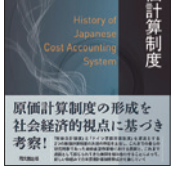
今月9日から、キャリア形成支援課主催の「オンライン企業研究セミナー『リーディングカンパニーの話を聞こう』」を開催しています。

今の時期から、できる限り多くの業界・企業の現状を知ることで、就職活動の準備が整えられるはずです。日本経済を支えている企業の方々の話をぜひ聞いてみてください。

商・建部教授が学会賞を受賞

建部宏明商学部教授が2020年度日本会計史学会賞を受賞した。

受賞したのは『日本原価計算制度形成史』（2019年・同文舘出版）。



原価計算制度の形成を社会経済的視点に基づいて考察し、新しい枠組みで日本原価計算制度形成史を論じた。

10月24日、オンラインで授賞式が行われた。

知の発信 ――科研費採択研究から

矛盾する事実から真実を導く能力を育む

ネットワーク情報学部准教授
望月 俊男

「ダイエットには糖質抜きがいい」「脂肪分を抑えたほうがいい」「やはりバナナが一番効く」――。ダイエットを例に挙げましたが、たくさんの情報の中で迷ったことは、だれにでもあると思います。新型コロナウイルス感染症についても、さまざまな専門家やメディアがいろいろなことを言っています。大量の情報の中から何が真実か判断し、信頼することは、たやすくありません。一見して矛盾する複数の事実から真実を導き出す能力を育むことがとても重要になってきています。専門的知識は必ずしも必要ではなく、汎用的に複数の一見矛盾する事実を冷静に分析・評価し、総合的に説明する能力が不可欠です。

そこで現在、複数の矛盾する文章を分析しながらそうした能力を育むためのウェブアプリケーション「EDDiE」の開発を進めています。このアプリでは、学生たちが一緒に話し合いながら、文章の重要な部分に線を引いてドラッグ&ドロップし、矛盾の理由を分析するために一つの表をまとめます。この過程で矛盾点を洗い出し、より信頼性の高い情報を見いだしたり、矛盾する理由を考えたりすることができます。この研究は、認識的認知の代表的研究者で現在ネットワーク情報学部外国人客員研究員のクラーク・A・チン教授（米ラトガース大）の理論が支柱になっています。

私が専門とする協調学習では、学生たちが意見を交換し、協力し合いながら考えを深めます。他者と話し合うことで、自分が見落としていたことに気づき、新しいアイデアを生み出すこともできます。

正解のない問題に対して、示された物事を鵜呑みにするのではなく、どうしてそういう意見が出るのだろうか、ということをしっかりと考え、確かめていこうとする認識的認知の能力を高めていく必要があります。それは、情報化社会で問題を解決し生き抜く力とも言えます。

（もちづき・としお）総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了。博士（学術）。専門は教育工学、学習科学。『学習科学ハンドブック』（共訳）など。

膨大な情報の海を進むための羅針盤

ネットワーク情報学部
外国人客員研究員
クラーク・A・チン

このプロジェクトの目標は、矛盾した主張や多くの誤情報を広めるSNSやウェブサイトなど現代のデジタル世界で見られる膨大な情報の海の中で、人々がうまく情報を取捨選択したり統合したりして理解できるようにするための指導法を開発し、研究することにあります。

今回、望月先生と一緒に仕事をする素晴らしい機会に恵まれました。開発中のウェブアプリケーション「EDDiE」は、異なる立場の証拠の量と質、異なる立場を取る専門家の数と質、そして発見された不一致の性質について考えることを促します。このアプリを試用することを楽しみにしています。

現実の世界では、友人や家族、さらにはオンラインで交流している見知らぬ人たちと科学的な問題を話し合うこともあるでしょう。

学生が生産的にアイデアを議論し、意見の相違を合理的かつ詳細に探究することを学ぶことができるように、学生たちと一緒に取り組んでいきたいと考えています。

このツールが、学生がオンラインで遭遇した意見の相違を特定し、解決するのに役立つことを期待しています。

例えば、新型コロナウイルス感染症やその治療法などについての異なる主張を、どのように解決するかを考える、より良い方法を学ぶことができるでしょう。

（Clark・A・CHINN）ラトガース大学教育学研究科教授。アメリカ教育学会、アメリカ心理学会フェロー。学習科学、科学教育、教育心理学の研究領域で、証拠を用いた推論に関する重要な研究を多数推進している。